

# 詩編について

## 第五卷

- ・ 晩の祈りについて
- ・ 第1週 晩の祈り



詩編作者に靈感を与えられた聖霊は、恵みを受ける準備ができているものを助けられるのである。このため、詩編唱和は神の尊厳にふさわしい尊敬と共に、喜びと優しい愛の心で行なわれなければならない。

…教会の名によって詩編を唱えるものは常に喜びや悲しみの動機を見出すことができる。この意味においても「喜ぶものとともに喜び、泣くものとともに泣く」（ローマ 12:1）という使徒の言葉があてはまるからである。こうして、自愛心に傷つけられた人間の弱さは、詩編を唱える声に心が一致する度合いに応じて いやされるのである。

教会の祈り 総則 104, 108

	土	日	月	火	水	木	金
第1唱和	詩編 141		詩編 11	詩編 20		詩編 30	詩編 41
第2唱和							
第3唱和	ヒィリピ2	黙示録 19	エフェソ1	黙示録 4, 5	コロサイ 3	黙示録 11, 12	

詩編 141

1, 前回のカテケジスでは、教会の偉大な夕べの祈り、晩課の構造と価値について一通り眺めました。さあ、その中に踏み入って旅を始めることにいたしましょう。それは、まるで詩編と賛美歌によって成り立っている「聖地」への巡礼のようです。神がご自分の靈感によって封印なされたひとつひとつの詩的な祈りを考察することになります。これらは、主ご自身がご自分に向かって捧げるようにと望んでおられる祈願です。主は、これらの祈りの中にご自分の子どもたちの鼓動を聞き取りながら、耳を傾けることがお好きなのです。

第2バチカン公会議後、教会の晩の祈りに加えられた詩編 141 から始めましょう。この詩編をもって、4週間にわたる晩の祈りの第1週の主日が始まるのです。

2, 「私の祈りをみ前に立ち昇る香のように、(差し伸べた私の両手を)夕べのささげもののように、受け入れてください」。この詩編の第2節は、この賛歌全体の特色あるしるし、晩の祈りの典礼に含まれている現実のあきらかな義化と考えることができます。表現されている考えは、礼拝と命、祈りと存在を親密に一致させる預言的神学の精神を反映しています。

純粹で誠実な心によって捧げられる同じ祈りは、神への供え物となるのです。祈っている人の全存在がひとつの生贄の行為ともなり、聖パウロがキリスト者たちを、神に受け入れられる生きた清い供え物として自分の体を神に捧げるように、と招く時に指し示している事柄への前奏曲ともなります。これこそ、神に受け入れられる霊的な生贄です(ローマ 12:1 参照)。

祈りの内にさしのべられた両手は、夕べの生贄の儀式の間に供え物から立ち昇る甘美な香の煙のように、神との交わりの架け橋となります。

3, この詩編は、ヘブライ語原典の中では不確実で翻訳に困難さのある文章によって私たちに伝えられている祈願の響きの内に続いていきます(特に詩編 141:4-7 参照)。

一般的な意味は、黙想と祈りに位置づけられ変容されるでしょう。すべてに勝って、ここで祈っている人は、自分の唇(詩編 141:3 参照)と心の動きが悪によって引き寄せられ誘惑されて、「あなたに逆らう者の企て」に加わる方へと傾くことをおゆるしにならないでください、と主に願い求めています(詩編 141:4 参照)。実際、この人の言葉は、彼あるいは彼女の倫理的選択を表現しています。悪人はこのような憧れを実行に移してしまうので、信じる人をたやすくそそのかして、彼らと席を共にし、そのよこしまな行いに加わって、彼らの差し出す「喜び」を共にさせてしまいます。

この詩編は、良心の糾明の性格を帯びています。このような良心の糾明には、常に神の道を選ぶ行為が伴うものです。

4, この箇所では、祈っている人は、自分は悪を行なう人々に加わることはありません、また、罪人の客となることはありません、そして、特別な客のためにとって置かれた香油(詩編 23:5 参照)が悪を行う者たちと共に見逃してもらふことの証しとなりませんように、という熱烈な宣言を叫ぶことによって始めています(詩編 141:5 参照)。より大きな熱心をもって悪人から徹底的に分離することを表明するために、詩編作者は、生き生

きとした厳しい裁きのイメージによって、自分のことを怒りに充ちて断罪しています。

これは、典型的な詩編の祈りのひとつです(詩編 58, 109)。現実的で絵に描いたような方法で、悪への敵意、善を選ぶこと、不正に対する厳しい裁きによって神が歴史の中に介入なさるという確信を強めることを目的としています(詩編 141:6-7 参照)。

5, この詩編は、正しいことを行なうことを固く決心した後、信頼という最後の祈願によって終わっています(詩編 141:8-9 参照)。それは、信じる者は悪人が自分に対して抱いている憎しみに飲み込まれることはなく、自分のために彼らが仕掛けた罠に落ちることはないという確信に基づく信仰、感謝、喜びの賛美歌です。このような方法で、義人は傷をうけることなく、あらゆる偽りを乗り越えることができます。他の詩編において言われている通りです。「狩人のわなから助け出された鳥のように、わなは破られ、私たちは自由の身となった」(詩編 124:7)。

神を喜ばせる供え物のように神に捧げられる夕べの祈り、という最初のイメージに立ちもどることによってこの詩編 141 の考察を終えることにいたしましょう。偉大な霊的指導者であり、4 世紀末から 5 世紀にかけて生き、その生涯の終りを南ゴールで過ごした東方の人、ヨハネ・カシアノは、キリスト論的文脈でこれらのみ言葉を読み直しています。「これらの言葉の中の、夕べの生贄という比喻について、より霊的には、最後の晩餐の間に救い主である主によって成就され、主が教会の聖なる秘儀の始まりを制定なさった時に、使徒たちに手渡されたと理解することができます。あるいは、この比喻を、次の日の夕べに、主が、ご自分の両手をさしのべて、ご自身を捧げられたということとして理解することもできます。この生贄は、全世界の救いのために、時の終りにいたるまで続けられるのです」(Le Istituzioni Cenobiche 修道生活についての教え, Abbey of Praglia, Padua 1989, p. 92)。

## 第1週 土曜日 晩課 第3唱和

### フィリピ 2:6-11 1

1, 晩の祈りでは、詩編に加えて、新約聖書の歌が含まれています。ただ今朗読された歌は疑いもなくもっとも意味深く神学的に豊かなものの 1 つでしょう。聖パウロが、ヨーロッパにおいて、足を止めて福音宣教した最初の地であるギリシアの都市フィリピのキリスト者たちに宛てて書かれた手紙の 2 章に置かれている賛歌です。この賛歌は元来のキリスト教典礼のひとつ表現であったと考えられています。使徒時代の教会の祈りに加わることができるのは、私たち 2000 年後の世代の者たちにとって喜ばしいことです。

この歌は二重に重なっている軌道にそって展開していきます。第 1 の動きは、下降ですが、後に上昇が続きます。人類への愛のために神の御一人子が人間になられた受肉の時の謙りという下降です。彼は、人々の中でもっとも価値のない奴隷たちのための刑罰である十字架の死に至るまで押しやられることで、自らを苦しむ人々、罪人、拒まれた人々のまことの兄弟となし、神としての栄光の「kenosis 放棄」へと真っ直ぐに飛び

込みます。

2, 他方には、御父が神性の輝きの内にキリストを復活させ、キリストが今や贖われた全宇宙とすべての男女によって主としてたたえられる時、すなわち復活の日に成し遂げられる勝利に充ちた上昇があります。私たちの目の前で、偉大なキリストの神秘、特に過越しの神秘が再び読み返されています。聖パウロは復活の宣言にそって(I コリント 15:3-5 参照)、キリストの過越しの神秘を「崇める」、「高く上げる」、「栄光あるものとする」と定義しています。

神の御一人子は、神の超越性という明るい地平線から、創造主と被造物との間の永遠の隔たりを超えてやって来ました。彼は、横取りしたものではなく、本性として彼に帰されるべき、彼の「神の姿」を、固守するかのよう握り締めたりはしませんでした。この特権を宝としてねたみ深く要求したり、自分の利益のために利用することを望みませんでした。かえって、キリストは自らを「むなしくして」、「仕える者となり(謙って)」貧しく弱く、辱めに充ちた十字架の死に定められた者として現れました。このパウロの賛歌の第2部(フィリピ 2:9-11 参照)で述べられている偉大な上昇の動きは、まさに、この卓越した謙りから来るのです。

3, 今、神は、栄光ある「名」を御子に授けながら、彼を「高く上げ」られます。聖書用語において、「名」はその人自身と彼の尊厳とを示しています。聖書の神の聖なる名である Kyrios 主という名が復活なさったキリストに与えられます。3つの部分に分けられた世界観に従って、天と地と黄泉(地の下)の礼拝のもとにこの名が置かれます。

このようにして、この賛歌の終りには、キリストは、古代キリスト者たちやビザンチンのバジリカの天蓋に勝利に充ちて座しておられる「Pantocrator 全能の主」のように、栄光の内に現れます。彼はまだご自分のまことの謙りと受難のしるしを身におびておられますが、神としての輝きのうちに現れます。苦しみと死において私たちの近くにおられるキリストは、今、私たちを祝福し、ご自分の永遠性を私たちに分かち合いながら、栄光の内に私たちをご自分に引き寄せてくださいます。

4, 聖アンブロジウスの言葉によって、このパウロの賛歌についての考察を終えることにいたしましょう。聖アンブロジウスは、「ご自分をむなしくし」、ご自分をいやしい者としたキリスト、すなわち、受肉と十字架上の奉獻において *exinanivit semetipsum* ご自分を無にされたキリストのイメージをしばしば用いていました。

特に、彼の詩編註解 CXVIII において、ミラノの司教は語ります。「十字架の木に吊り下げられたキリストは、…やりで刺し貫かれました。その香りを全世界に広げる神に受け入れられるこの生贄から、いかなる香油にもまさる甘美な血と水が流れ出しました。こうして、イエズスは、刺し貫かれ、罪のゆるしと贖いの良い香りを広げました。み言葉であった彼が人となり、富む者であった彼が限界を持った貧しい者となり、こうして、私たちは彼の貧しさによって富む者となったのです」(II コリント 8:9 参照)。

黙示録 19

1, 教会の祈りの Vespers 晩の祈りを構成している詩編や賛歌のシリーズを続けながら、アレルヤと喝采の続唱によって成り立っている黙示録 19 章からとられた賛歌にたどり着きました。

これらの喜びに満ちた祈りの背後には、その前の章で、教会に対するあからさまな迫害のシンボルであった悪と虐げの町、バビロン帝国の崩壊にあたって、王たち、商人たち、水夫たちによって歌われた劇的な哀歌があります。

2, 地上から立ち昇ったこの叫びを打ち破る、典礼的な本質をもつ喜びに満ちた合唱が天に響き渡り、アレルヤに加えてアーメンが繰り返されます。現在、晩の祈りのためにひとつの賛美歌に構成されている交唱のようなさまざまな喝采は、黙示録の中さまざまな人物の唇に置かれているものです。最初に私たちの目に映るのは、天使たちと聖なる人々からなる「大群衆」です(黙示録 19:1-3 参照)。それから、私たちは、賛美と感謝に充ちた天の典礼の司祭職を果たしているように思われる「24 人の長老たち」と「4 つの生き物たち」の声を聞き分けることができます(黙示録 19:4 参照)。最後に、独唱者の声上がり、交代して歌い始めた「大群衆」を巻き込んでいきます(黙示録 19:6-7 参照)。

3, これから先、私たちの旅の途上で、壮大で祝いの雰囲気にも満ちたこの賛歌の中のさまざまな声によるひとつひとつの交唱について見ていく機会があると思います。今日は、その中の 2 つに注目することにいたしましょう。最初は、次のように述べている導入の喝采です。「勝利(救い)と栄光と力は私たちの神のもの。神のさばきは真実で正しい」(黙示録 19:1-2)。

この喜びに満ちた叫びの中心に、断固とした意志を持って歴史の中に介入される神が描き出されています。主は、無感覚な皇帝のように無関心なお方でもなく、人間のできごとから隔絶したお方でもありません。詩編作者が語っている通り、「その王座は天にある。目は人々の上に注がれ、その心を見通しておられる」(詩編 11:4)のです。

4, 実際に、神のまなざしはそのみ業の源泉であり、横暴で圧制を振るう帝国に介入して打ち砕き、主に挑みかかる高慢な人々を引きおろし、悪を犯す者たちを裁かれます。すぐ前の章で、バビロンを根こそぎにして海に投げ込んでしまうという神のおそろしい介入について、黙示録の作者が言及しているように(黙示録 18:1-24)、詩編作者も、神がどのようにして歴史の中に飛び込んでこられるかを描き出しています(詩編 11:7 参照)。晩の祈りの賛歌は、このみ業について触れています(黙示録 19:2-3)。

私たちの祈りは、何にもまして、神のみ業、主が悪に打ち勝たれることによって勝ち取られた主の力ある正義、栄光を宣言し、賛美しています。黙示録の短くて本質的な叫びが宣言し、詩編の歌がたびたび繰り返している通り(詩編 146:6-9 参照)、神は正しい人、犠牲者たちによりそって、ご自身を歴史の中に現存させておられます。

5, この歌のもうひとつのテーマについて強調しておきたいと思います。最後の喝采の中で発展していく、黙示録自体の主要なテーマです。「小羊の婚宴の時は来て、花嫁のしたくはできた」(黙示録 19:7)。キリストと教会、小羊と花嫁は、愛の深い交わりの内

にあります。

4世紀のシリア教会の偉大な教父、聖エフレムの詩による証しを通してこの婚姻の神秘に光を当てたいと思います。カナの婚宴のしるしを象徴的に用いながら、彼は大きな賜物をいただいたことに対して、キリストを賛美するために、街それ自体に紹介しています。「私の客たちと共に、私のことを、彼を招くにふさわしい者とみなしてくださいました。彼は、天の花婿であり、お降りになって皆を招いてくださいました。私もまた、彼の清らかな婚姻の祝いに招いていただきました。人々の前で、私は彼を花婿と認識いたします。彼のようなお方は他にはおられません。彼の婚姻の宴は何世紀にも渡って準備されてきたもので、豪華に飾り立てられ、何も欠けたところはありません。欠けていたすべてを彼が補ってくださったカナの婚宴のようなものではありません」(Inni sulla Virginita, 33, 3:L' Arpa dello Spirito, Rome, 1999, pp. 73-74)。

6、カナの婚宴について歌ったもう1つの歌の中で、聖エフレムは、ここでは、他の人々の婚宴(結婚したばかりのご夫婦の婚宴)に招かれているキリストが、ご自分の婚姻を祝うことを望んでおられると主張しています。ご自分の花嫁、すなわち非常に忠実な魂との婚姻です。「イエズス、あなたは他の人、すなわちカナのご夫婦の婚宴に招かれています。けれども、これはあなたご自身の清らかで美しい祝いです。主よ、あなたの客たちはあなたの歌を必要としていますから、この祝いは私たちの日々を喜ばせます。あなたの豎琴をあらゆるもので満たしましょう。魂はあなたの花嫁、体はあなたの婚姻の床、あなたの客は五感と思考力。ただ1つの体があなたの婚姻の祝いであるなら、教会全体が婚姻の宴です」(Inni sulla Fede, 14, 4-5:op. cit., p. 27)。

## 第1週 月曜日 晩課 第1唱和

### 詩編 11

1、晩の祈りの本質的な要素を包含している詩編についての考察を続けましょう。ただ今、ヘブライ語原典では「Adonaj」、すなわち主という聖なるみ名がちりばめられている信頼に充ちた短い祈り、詩編11が私たちの心に鳴り響きました。この詩編のはじめ(詩編11:1参照)に響き渡る聖名は、中心部分(11:4-5)で3度、最後(11:7)に再び繰り返されます。

この詩編全体の霊的な鍵は、最後の一節によく表現されています。「神は正しく、よいわがを愛されるかた」。これこそ、暗闇と試練の日におけるあらゆる信頼の根源であり希望の源泉です。神は正しさと間違いとに無関心ではありません。主は善い神であり、暗く不可解で神秘的な運命ではありません。

2、この詩編は2つの場面の中で本質的な事柄を説明しています。最初は(詩編11:1-3)、悪人の明らかな勝利について述べられています。彼は勇者、あるいは狩人の姿で描写されています。悪人(神に逆らう者)は、自分の獲物である義人を乱暴に打ちのめそうとして、猟のための長い弓を張っています(詩編11:2参照)。この人は、このような情け容赦のない運命から逃れようという考えによって誘惑されています。むしろ、悪の渦中か

らも、悪人の猛攻撃からも、二心のある罪人によって放たれた中傷という矢からも遠くはなれ、彼は「鳥のように山に」(詩編 11:1)飛び去ろうとしています。

悪の侵略を前にして孤独と無力感にさいなまれている信者の中には、ある種の絶望があります。正しい社会秩序の柱は揺らぎ、人間社会の土台は危うくされてしまったように思えるのです(詩編 11:3 参照)。

3, さあ、第 2 の場面(詩編 11:4-7 参照)を概観する視界の中に転換点が訪れます。天の玉座に座しておられる主が、その何でも見通す眼差しをもって全人類の地平線にお現れになったのです。神は、その全知全能のしるしである超越的で優越的な立場から、悪人と義人とを見分け、不正な者に力強く命令を下しながら、一人一人の人間を調べ、試されます(詩編 11:4-5 参照)。

神の目、私たちの行動に釘付けにされ注意を払っているその瞳、というイメージが呼びさまされて、慰めを与えてくれます。主は、金箔で飾られた自分の世界に閉じこもって、かけ離れたところにいる王様ではなく、むしろ、善と正義をもってそばにいてくださる注意深い現存です。主は、み言葉とみ業によって介入しながら、目を注ぎ、養ってくださるのです。

主は、ソドムで起こったように(創世記 19:24 参照)、歴史を清め、悪に命令を下す神の正義の象徴である「炭火と硫黄が逆らう者にふりかか」(詩編 11:6)るようになさる、ということに義人は予め予見しています。最終的な運命のかたどりである、この燃える雨に打ちのめされた悪人は、遂に「地上でさばきをおこなわれる神がおられる」(詩編 58:12)ということを経験するのです。

4, この詩編は、罰と裁きという悲劇的なイメージによって終わるものではありません。最後の節は、自分の主、正しい審判者、特にいつくしみ深い解放者を観想している義人のために、予め用意されていた光と平和という地平線を開いてくれます。「心の正しい人はその顔を仰ぎ見る」(詩編 11:7)。これこそ、悪から解放してくださった神との喜びに満ちた交わりと曇りない信頼です。

歴史を通じて、数え切れない義人たちは、同じ体験をしてきました。多くの物語は、殉教者たちが拷問の最中にも信頼し、試練の中で揺るぐことなくしっかりと立っていたことを語っています。

「Atti de Euplo」の中で、ディオクレトスの治世に、304 年頃亡くなったシチリアの助祭殉教者が次のような連祷中で自ら叫んでいます。「キリストよ、ありがとうございます。あなたのために苦しむ時に私の楯となってください。父と子と聖霊を崇めます。キリストよ、ありがとうございます。キリストよ、私を助けるために来てください。キリストよ、あなたのために苦しんでいます。ご自分にふさわしいと見なしてくださったしもべたちの中で、主よ、あなたの栄光は偉大です。主イエズス・キリストよ、ありがとうございます。あなたの力は私を強めてくださいますから。あなたは、悪を行なう者たちによって私の魂がそこなわれることをお許しにならず、あなたのみ名の恵みを与えてくださいました。今、私の中であなたがなさってくださったことを堅固なものとしてください。恥知らずの敵は混乱に陥ることでしょう(A. Hamman, Preghiere dei Primi Cristiani 初代キリスト者たちの祈り, Miran, 1955, p. 72-73 参照)。

エフェソ 1:3-10 1

1, エフェソの教会への手紙を始める「祝福」の輝かしい賛歌は、毎週月曜日の晩の祈りに唱えられ、私たちが旅しながら進んでいく黙想のシリーズの主題となるものです。ですから、今回は、私たちのためにキリストの内に成し遂げられた素晴らしい神のみ業を崇めるようにと定められ、完全で印象深い建物のような、この荘厳で立派に構成されているテキストを、全般的に眺めることで満足することにいたしましょう。

この賛歌は、時間と創造の先を進む「前から」によって始まります。これは、神の永遠性のことです。ひとつのご計画がその中に包含されています。それは、私たちを超越するもの、「前もって定められていたこと」、言葉を変えて言うなら、救いと栄光に満ちた運命の愛深い壮大なご計画です。

2, 創造と贖い、宇宙と人間の歴史を包含するこの超越的なご計画において、神は「愛のうちに」「キリストのうちにすべてのものを集められる」こと、すなわち、天にあるもの、地にあるもの(エフェソ 1:10 参照)すべてのものの秩序を立て直し、深い意味を与えることを初めから定めておられたのです。もちろん、彼は「ご自分の体である教会の頭」(エフェソ 1:22-23)ですが、この世界に関わる生命の根源でもあられるのです。

こうして、キリストの支配は宇宙に、さらに教会という特別な地平線にも及びます。キリストの支配には「実現」という役割があり、隠されていた「神秘」は時が満ちると彼の内に表され、すべての実在は、永遠から御父によって抱かれていたご計画を、その特別な秩序とレベルにまで、実現するのです。

3, 後日考える機会がもてると思いますが、このような種類の新約の「詩編」は、「み旨」(エフェソ 1:9 参照)、「選び」(エフェソ 1:6 参照)、神の愛の表現であり生き生きとしたしるしである救いの歴史全体に焦点を当てています。

ここでは、十字架における「ひとり子の血によってあがなわれ」たこと、「罪のゆるしを受けた」こと、あふれるほどに注ぎ出された「神の豊かな恵み」(エフェソ 1:7 参照)を崇めています。これは、キリスト者たちが神の子とされていること(エフェソ 1:5 参照)と、三位一体の命との親しさに入れていただいているという「(神の)み旨の神秘」を示していただいた(エフェソ 1:9)ということです。

4, エフェソの教会への手紙を始めるこの賛歌を全般的に眺めながら、4世紀に生き、あらゆる困難の中でコンスタンチノーブルの司教を務め、2度も追放されたことのある、卓越した教師、祈りの人、素晴らしい聖書解釈者である聖ヨハネ・クリゾストモに耳を傾けることにいたしましょう。

この賛歌について解説している彼のエフェソの教会への手紙についての最初の説教の中で、彼は「キリストのうちに」私たちがいただいている「祝福」について感謝をもって考察しています。「本当に、何か欠けているものがあるのでしょうか?あなたは不死の者とされ、自由な人とされ、子としていただき、義としていただき、キリストと共に治め、キリストと共に栄光あるものとされる兄弟、共同の相続人にしていただきました。これらすべてが私たちに与えられたのです。次のように書かれている通りです。『御子とともにすべてのものを与えてくださらないことがあろうか』(ローマ 8:32)。あなた方



の初穂(I コリント 15:20, 23)は天使、ケルビム、セラフィムたちによって崇められています。ですから、欠けたものがあり得ましようか」(p. 62, 11)。

聖ヨハネ・クリズストモは続けています。「神のみ旨がよしとするところにしたがって」神はこれらすべてのことを私たちのためにしてくださいました。これはどういう意味なのでしょう。神は、私たちの救いを情熱的に憧れ熱烈に望んでくださるという意味です。「では、なぜ神はこれほどまでに私たちを愛してくださるのでしょうか。なぜこれほど大いなるご好意を感じてくださるのでしょうか。ただいつくしみによることです。事実、「恵み」はいつくしみの一部をなすものです」(同上 13)。

このことから、この古代の教父は次のように結んでいます。「ひとり子によってわたしたちに恵み与え、私たちはその恵みをたたえる」ためにすべてのものは成し遂げられると聖パウロは語っています。実際、「神は私たちを罪から解放してくださいただけでなく、私たちを愛される者としてくださいました。…私たちの魂を飾り、美しく、魅力的で、愛されるものとしてくださいました。」そして、聖パウロが、神は御子の血によってそのようにしてくださいと語る時、聖ヨハネ・クリズストモは次のように叫んでいます。「私たちのために、神はご自分の血を流してくださいただけです。これに勝るものは何もありません。私たちが子としていただいたこと以上に偉大な神の賜物とは、ご自分の御子に容赦なさらなかった事実です(ローマ 8:32 参照)。罪が赦されたということは本当に偉大なことです。しかし、もっと偉大なことは、それが主の御血を通して起こったということなのです(同上 14)。

## 第1週 火曜日 晩課 第1唱和

### 詩編 20

1,最後の祈願「神よ、王に勝利を与え、私たちの祈りにこたえてください」(詩編 20:10)は、ただ今拝聴し、これから黙想しようとしている詩編 20 の本質を啓示してくれます。これから、私たちはシオンの神殿で執り行われていた古代イスラエルの儀式の間に唱えられていた王の詩編を眺めようとしています。この詩編は、王のために、特に「悩み苦しむ日」(詩編 20:2)神の祝福を願い求めています。全国民が戦争という悪夢によって深く悩み、苦悩の淵に落とされていた時でした。実際、戦車や馬について言及されており(詩編 20:8 参照)、地平線上に進軍して来ているかのようです。しかし、王と彼の民は、弱っている者、虐げられている者、傲慢な征服者たちの餌食となった人々とともに行進してくださる主に信頼を置いています。

いかにしてキリスト教の伝統がこの詩編を卓越した「油注がれた王」(詩編 20:7)であるキリストにささげられた賛歌に変容させたかが容易に理解できます。主は武器ではなく聖霊の力に満ちてこの世界に入ってこられます。主は終りのない攻撃を、悪と狡猾さ、尊大さと傲慢、うそとエゴイズムに対して加え続けます。地上の支配力の象徴であるピラトに対してキリストが語られた言葉が、私たちの耳に鳴り響きます。「私は王である。真理を証しするために私は生まれ、この世に来た。真理に属する者はみな、私の声を聴

く」(ヨハネ 18:37)。

2, この詩編の構造を一望してみると、エルサレムの神殿でとり行なわれている典礼の祝祭が透かし模様のように浮かび上がってくることに気づきます。それは、国民の頭である王のために祈っているイスラエルの子らの集会を描いています。実際、この詩編は、「油そそがれた王」(詩編 20:7)を見捨てることなく、守り支えてくださる「ヤコブの神」(詩編 20:2)に王が捧げる多くの生贄や焼き尽くす供え物の1つである生贄の儀式についての思いをはせながら言及することによって始まっています。

この祈りは、主が安心の源であるという確信によって深く特徴付けられています。主は、契約という主題によって結ばれている王と全会衆との信頼に満ちた願いに出会うためにやって来られるのです。戦争の脅威は、それによって引き起こされるあらゆる恐れと危険と共に、その場に漂っています。神のみ言葉は、具体的なメッセージというよりも、人間の悲惨に応じて偉大で小さなひとつの声として現れます。このために、この詩編は、困難の中にある人々の感情に対応しながら、軍隊用語を用い、イスラエルの戦いの過酷な状況(詩編 20:6 参照)を考察しています。

3, この詩編の第7節には、ひとつの転換点があります。それ以前の節では神に向かって祈っていましたが(詩編 20:2-5 参照)、第7節では確かな答えをいただいたと断言しています。「今、私は知る。神が油そそがれた王に勝利を与えられることを。神は救いをあらし、尊い住まいから彼にこたえられる」。この詩編は、このような保障を与えてくれるしるしが何であったのかは明らかにしてはいません。

しかし、自分たちの戦車と騎兵という物質的な力を頼りにしている敵の立場と自分たちの信頼を神におき、そのことのゆえに勝利を得たイスラエルとの間の明暗をはっきりと表現しています。すぐに、心の目はあの有名なダビドとゴリアテの場面を思い浮かべます。フェリシテ人の勇士の武器と尊大さに対して、あのヘブライ人の若者は、弱く守ってくれる者のない者を守ってくださる主のみ名を呼び求めます。事実、ダビデはゴリアテに向かって次のように言っています。「わたしに向かって剣や槍や投槍をもって向かって来るのか。私は万軍の主のみ名によって立ち向かおう。…主は剣や槍によって救うのではない。戦いは主のものなのだ」(I サムエル 17:45, 47)。

4, 歴史の中で実際におこなわれた戦いの論理に結びついているにもかかわらず、この詩編は、人が暴力へと向かうことを許しません。イザヤが叫んでいます。「戦車に信頼し、馬により頼む者に呪いあれ。彼らの数は多く、軍馬にまたがり、非常に強い。しかし、イスラエルの聖なる方に目を向けず、主に聴こうとしない」(イザヤ 31:1)。

正しい人は、信仰、善意、ゆるし、平和の供え物によってあらゆる形態の悪に逆らいます。使徒パウロはキリスト者たちに次のように忠告しています。「悪に悪を返してはならない。あらゆる人の目にとって気高いことは何かを考えよ」(ローマ 12:17)。この詩編を解説しながら、初代教会(3-4 世紀)の歴史家であるカエサリアのエウセビオは、キリストのしてくださったことによって死の悪ささえも打ち負かすことができるということをキリスト者たちは知っている、というところにまで自分の視野を広げています。

「隠されたものであれ目に見えるものであれ、あらゆる悪の力と神の敵とは、救い主に背を向けて逃げ出し、倒されるのです。救いを受けたすべての人々は過去の破滅から立ち上がります。このことのゆえに、シメオンは言いました。「彼は多くの人を倒したり

立ち上がらせたりするために立てられた」(ルカ 2:34)。つまり、敵の破滅と、倒れていたのに主によって立ち上がらせていただいた人々の復活のためなのです」(PG23, 197)。

## 第1週 火曜日 晩課 第3唱和

### 黙示録 4:11, 5:9-12

1, ただ今拝聴し、これから黙想しようとしているのは、私たちの毎週のカテケジスで解説している晩の祈りの詩編の一部分をなしている賛歌です。典礼の習慣で、この深い祈りは、かなり長い文節に属する聖書のいくつもの断片を合わせて作り上げられました。

ここで取り上げるのは、黙示録の4章と5章から取られたもので、偉大で栄光に満ちた天の場面を描写しています。復活なさったキリストのシンボルである小羊が座しておられる玉座です。「ほふられた小羊」は生きて栄光に満ちて立っておられます(黙示録 5:6 参照)。

二人の神的存在が天の軍勢の聖歌隊に囲まれ、世界の東西南北にいる神の現存の天使を思い出させる4つの生き物、24人の長老たちに伴われています。長老とは、ギリシャ語で presbyteroi です。この人数はイスラエルの12部族と12使徒を考えさせます。言葉を変えて言うなら、これは旧約と新約の統合です。

2, 神の民の集会は、神の世界創造のみ業を表現している「栄光と誉れと力」を崇めながら、主への賛歌を歌っています(黙示録 4:11 参照)ここで、特に重要なシンボルが紹介されています。ギリシャ語で biblion つまり「巻物(あるいは本)」です。それは完全に近寄りがたいものです。読むことができないように7つの封印がされています(黙示録 5:1 参照)。

このようにして、秘められていた預言に関わることとなります。この巻物は、人間の歴史の中で完全な正義の勝利が成し遂げられるべきであるという一連の神の宣言を含んでいます。巻物が封じられたままであるなら、これらの宣言が知られることも履行されることもなく、悪は広がり続け、信じる者たちを虐げ続けることになってしまいます。何らかの権威ある介入が必要だったのです。それはほふられ、甦られた小羊によって成し遂げられました。彼は、「巻物を受け、封印を解く」(黙示録 5:9) ことができたのです。

キリストは歴史の偉大な解釈者であり主、歴史の中に展開される神のみ業の隠されたご計画を啓示してくださるお方です。

3, この賛歌は、歴史を超えるキリストの力の源を私たちに示しながら続いていきます。それは、キリストの過越しの神秘以外の何ものでもありません(黙示録 5:9-10 参照)。キリストは「ほふられ」、ご自分の御血によって悪の力から全人類を「贖って」くださいました。「贖う」という言葉は、出エジプトのできごと、すなわちエジプトでの奴隷状態からの解放に関連しています。昔の律法においては、一人の人の贖いはもっとも近い親族の義務としての務めでした。ご自分の民の場合、イスラエルをご自分の「初子」と呼んでくださった(出エジプト 4:22 参照)神ご自身でした。

キリストは全人類のためにこの務めを果たしてくださいました。彼が成し遂げてくだ

さった贖いは、単に私たちを過去の悪から贖うことに奉仕しただけでなく、私たちの傷をいやし、私たちをみじめさから救い出してくださるためのものでした。キリストは私たちに新しい内的存在を与えてくださったのです。キリストは私たちを御自分の尊厳を分かち王とし祭司としてくださったのです

シナイ山で神が宣言なさったみ言葉に言及しながら(出エジプト 19:6;黙示録 1:6 参照)、この賛歌は、贖われた神の民は全被造物を導き聖なる者とする王であり司祭として作り上げられると繰り返し述べます。この聖別は、キリストの過越しに基礎を置いており、洗礼によって成就されました(I ペトロ 2:9 参照)。このことから、教会に自分の尊厳と使命を自覚するようという呼びかけが来るのです。

4, キリスト教の伝統は常にキリストについて過越しの小羊というイメージを用いてきました。2 世紀に小アジアの都市サルディスの司教であったメリトンが復活祭の説教の中で語っていることに耳を傾けてみましょう。「苦しむ人類への愛のために、キリストは天からこの地上にお降りになりました。彼は、おとめのご胎内で私たちの人間性を身にまとわれ、ひとりの人間のようにしてお生まれになりました。小羊のように取り分けられ、小羊のようにほふられ、このようにしてこの世の隷属から私たちを贖ってくださったのは、彼です。隷属から自由へ、暗闇から光へ、死から命へ、圧政から永遠の王職へと私たちを運んでくださったのは、彼です。彼は、私たちを新しい祭司職とし、永遠に選ばれた民としてくださいました。もの言わぬ小羊、ほふられた小羊、マリアの子、傷のない小羊とは彼のことです。彼は、群の中から引き出され、死に渡され、夕暮れにほふられ、夜に葬られました」(nn. 66-71 : SC123, pp. 96-100)。

終りに、ほふられた小羊キリストご自身がすべての民に向かって呼びかけています。「自らの罪によって囚われの身となっている全人類よ、おいでなさい。罪の赦しを受けなさい。私はあなた方の赦しであり、あなた方の救いの過越しである。私は、あなた方のためにほふられた。私は、あなた方の贖い、あなた方の道、あなた方の復活、あなた方の光、あなた方の救い、あなた方の王である。あなた方を天の住まいに導き、永遠から存在しておられた御父をあなた方に示し、その右の手であなた方を立ち上がらせるのは、私である」(n. 130:同上, p. 122)。

## 第1週 水曜日 晩課 第3唱和

### コロサイ 1:12-20

1, 私たちはただ今、コロサイ人への手紙の中の素晴らしいキリスト論的賛歌を拝聴いたしました。晩の祈りでは、このテキストをおそらくその元の形に戻して、つまり1つの歌として信者たちに典礼的に表し、差し出すことによって、4週間のいずれにもこの賛歌が登場します。実際、多くの学者たちは、聖パウロが、繁栄して人口密度の高い街コロサイのキリスト者共同体に宛てた手紙の中に挿入したこの歌は、小アジアの教会の賛美歌からとったものであろうと考えています。

使徒は現在のトルコの一部であるフリギアの中央にあたるこの地方を訪問したこと

はありません。この教会は、エパfrasという名の彼の弟子の一人によって創立されました。エパfrasについては、この手紙の最後に、パウロ自身が自分の医者と呼んでいた(コロサイ 4:14 参照)福音史家ルカ、「バルナバのいとこ」(コロサイ 4:10)マルコとともに言及されます。このマルコは、パウロとバルナバの旅の伴侶で、後に福音史家となったあのマルコと同一人物でしょう(使徒 12:25;13:5, 13 参照)。

2, この歌にもどってくる機会は何度かありますので、ここでは、コンスタンチノーブルの司教であり雄弁家として記憶されている、4世紀の有名な教父、聖ヨハネ・クリゾストモの霊的解説を思い出しながら、全体を一望することにいたしましょう。宇宙の主であるキリストの壮大な姿がこの賛歌の中に立ち現れています。旧約聖書の中で崇められている神の創造の知恵のように(たとえば箴言 8:22-31)、「子はすべてのものに先立ってあり、すべてのものは神の子のためにある」のであり、実際、「すべては子によって造られた」(コロサイ 1:16-17)のです。

こうして、ひとつの超越的な計画が世界に表されました。神はこのご計画を御子のみ業を通して現実のものとなされました。ヨハネはこのことを彼の福音書の序文の中で次のように語っています。「万物はみ言葉によってなった。なったもので、み言葉によらずになつたものはひとつもない」(ヨハネ 1:3)。万物は、そのエネルギー、命、光と共に、「愛するひとり子」(コロサイ 1:13)である神のみ言葉の似姿を持っています。新約の啓示は、「創造されたものの偉大さと美はそれらの創造主についてのふさわしい認識をもたらす」(知恵 13:5)と語った旧約の賢者たちの言葉に、新しい光を投げかけています。

3, コロサイ人への手紙の中の歌は、キリストについてのもう1つの働きを描いています。彼は教会の中でご自身を現された(コロサイ 1:18 参照)救いの歴史の主でもあるのです。この救いは「十字架の血によって」(コロサイ 1:20)成し遂げられ、全人類にとっての和ぼくと平和の源です。

それは、生き生きとしたキリストの現存によって特徴付けられている目に見える範囲のものだけでなく、歴史という、被造物である人間のもっとも独特な現実でもあるのです。歴史は、盲目的なあわれみや理性をもたない力にあるのではなく、罪や悪の中にあつてさえ、キリストのみ業による完成に向かって支えられ導かれています。このようにして、現実全体がキリストの十字架によって御父と「和解させて」いただくことになるのです(コロサイ 1:20 参照)。

こうして、この賛歌は、私たちが信頼へと招きながら、宇宙と歴史の素晴らしいフレスコ画を描き出しているのです。私たちは、時間と空間の中に意味もなく撒き散らされた無益な一粒の塵ではありません。御父がその愛によって御心に抱いてくださっている賢明なご計画の部分なのです。

4, 申し上げたとおり、この考察の冠は聖ヨハネ・クリゾストモの語ったことです。彼は、コロサイ人への手紙の解説の中で、この歌について広範囲にわたって考察しています。最初に、「私たちが光の国を継ぐ神の民としてくださった」(コロサイ 1:12)神の賜物の壮大さを強調します。「何故、彼は『継ぐ』と言っているのでしょうか?」とクリゾストモは自問自答しています。「誰も、自分自身の業によってみ国に到達することはできない、ということを示すためです。実際たびたびそうであるように、「遺産」という言葉は「幸運」という意味をもつのです。誰の行状も、み国にふさわしくはありません。

すべては主からの賜物なのです。この理由から、主は仰せになります。『すべてのことをなし終えてから、次のように言いなさい。私は取るに足りないしもべです。なすべきことをしたに過ぎません』(PG62:319)。

頭であるキリストが教会のために成し遂げてくださったことは、無償の愛の明白なしるしです。ここで(コロサイ 1:18 参照)、クリゾストモは次のように説明しています。「キリストの尊厳について語った後で、使徒は、キリストと私たちとの親しい交わりを示そうとしながら、男性たちと女性たちへのキリストの愛についても語っています。『彼は御自分の体である教会の頭です』。これほど崇められ、すべてのものの上におられるキリストが、ご自分より低い人々とご自身とを一致させてくださるのです」(PG62:320)。

## 第1週 木曜日 晩課 第1唱和

### 詩編 30

1, 祈っている人の心から、感謝が立ち昇り、死の悪夢の後の豊かさと甘美さとが漂っています。これが、ただ今、私たちの耳だけでなく心にも響いてきた詩編 30 から力強く浮かび上がってくる感情です。

この感謝の詩編は、文学的に素晴らしく巧妙にできています。主によって恵まれた解放をさまざまなシンボルによって表現しています。「墓に下る」ことが「死の国から私を引き上げ」によって補われています(詩編 30:4 参照)。「滅びは神の怒りのうちに」は「いのちは恵みのうちに」によって置き換えられています(詩編 30:6 参照)。「嘆き」は「踊り」に、「荒布」の服は「晴れ着」に取って代わります(詩編 30:12 参照)。

死の夜が過ぎ去った後、新しい日の夜明けの太陽が昇ります。キリスト教の伝統は、この詩編を復活祭の賛歌と見なしています。4 世紀の偉大な修道者であり作家ヨハネ・カシアノが、晩の祈りの典礼のために編纂された詩編書の中でとりあげているこの詩編の序文の中で、このことが証言されています。「キリストはその栄えある御復活のゆえに御父に感謝をお捧げになっています」。

2, 祈っている人は、たびたび、少なくとも 8 回は「主」に立ちもどっています。主に向かって賛美を歌いますと宣言し(詩編 30:2, 13 参照)、試練の時にはどのようにして主に叫びを上げたか(詩編 30:3, 9 参照)、そして神の解放をもたらす介入について思い出していただくために(詩編 30:2-4, 8, 12 参照)、あるいは、ふたたび主のあわれみを嘆願するために(詩編 30:11 参照)。もうひとつの節では、祈っている人は信じる人々を主に賛美を歌い感謝を捧げるようにと招いています(詩編 30:5 参照)。

気分はずっと、悪夢を体験した恐ろしい時と解放された喜びとの間を行きつ戻りつしています。もちろん、危険は通り過ぎたとはいえ、重大なもので、未だに身震いが起こってきます。過去の苦しみの記憶は、まだはっきりとして生々しいのです。その目の涙はぬぐわれたばかりです。しかし、今、新しい日の夜は明けました。死は、いつまでも続く命の展望に道を譲りました。

3, このようにして、この詩編は、絶望という暗い混沌に自ら釣り込まれるのを赦して

はならないということを示しているのです。もちろん、自分の力で自分を救うことができるという幻想に陥る必要もありません。実際、この詩編作者は傲慢と自己満足によって誘惑されています。「やすらかな心で私は言った。『私は けっして ゆるがない』」（詩編 30:7）。

多くの教会の教父たちもまた、繁栄の時に忍び込むこの誘惑について考察し、人間に対する神の訴えかけとして、試練の時と見なしています。ルスペの聖フルゲンチオ司教（467-532）は、この誘惑について考察し、プロバという修道士に宛てた手紙の中で、この詩編について解説しながら次のように語っています。「この詩編は、時々自分の健康をまるで自分の徳のひとつでもあるかのように誇ることがあり、このことの中に、たいへん重症な病気を見出した、と告白しています。事実、次のように語っています。『あなたは恵みの内に私をゆるがない山のようにされた。あなたが顔を隠された時、私はおそれ おののいた』。さらに、神の恵みの助けを示すために、おそらく自分ではすでに助けをいただいているにもかかわらず、へりくだって、すぐに付け加えています。『神よ、私はあなたに叫びを上げ、私はあわれみを願い求める』。誰でも、自分の必要性を意識していなければ、あるいは、自分の力だけに頼って何とかかなると思いついでいるなら、助けを願い求めようとはしないでしょ」（ルスペの聖フルゲンチオの手紙, Rome, 1999, p. 113）。

4, 繁栄の時に陥った高慢の誘惑について告白した後、詩編作者は主に向かって次のように言いながら、続いて起こった試練について思い出しています。「あなたが顔をかくされると、私はおそれ おののいた」（詩編 30:8）。

祈っている人は、どのように祈ったかを覚えています（詩編 30:9-11）。彼は叫びを上げ、助けを懇願し、死者が神をたたえることはできないのだから死は神には何の益ももたらさないし、神が彼らを見捨てられたのだから彼らが神への忠実を宣言する理由もないという事実によって、自分の嘆願を正当化しながら、死から救ってくださるようにと乞い求めたのです。同じ論法を詩編 88 の中でも見出すことができます。そこでは、祈っている人は死に瀕しており、神に次のように願っています。「だれが墓の中であなたのいつくしみを語り、滅びの中であなたのまことをのべるであろうか」（詩編 88:12）。同様に、ヘゼキヤ王も、重い病を得てから癒されて、神に向かって次のように語りました。「死の国はあなたをたたえず、死はあなたを賛美しない…生きている者、生きている者だけが、神よ、あなたをたたえる」（イザヤ 38:18-19）。

このようにして、旧約聖書は、死を超える神の勝利への熱烈な人間の憧れを表現し、神が勝利者となられた多くの事例を挙げています。荒野での餓死の脅威にさらされた民、恩赦によって死を免れた囚人たち、癒された病人たち、海で沈没から救われた水夫たち（詩編 107:4-32 参照）。しかしながら、これらの勝利は恒久的なものではありませんでした。遅かれ早かれ、死は常に首尾よく優位に立つことになっていたのです。

それでも、勝利への希望は、これらすべてにも関わらず存在してきましたし、それが最後には復活への希望となったのです。この強い希望の成就是キリストの復活によって完全な保障を得ています。このことのために、私たちはどれ程神に感謝しても充分とはいえません。

黙示録 11, 12 章

1, ただ今、私たちが「全能の神なる主」に向かって立ち昇らせた晩の祈りの典礼の中に配置されているこの歌は、黙示録 11 章と 12 章の中のいくつかの節を選んで構成されています。この努力と希望の書の中に響き渡った 7 つのラッパの最後のラッパが今や吹き鳴らされたのです。新約と旧約のすべての義人たちの居並ぶ天の宮廷の 24 人の長老たち(黙示録 4:4; 11:6 参照)が、ひとつの賛美歌を合唱します。この賛美歌はおそらく初代教会の典礼集会の中ですでに使用が始まっていたものです。彼らは神を礼拝します。神は世界と歴史の支配者であられ、ご自分の正義と愛と真理の御国を打ち立てる準備を整えられたのです。

この祈りの中で、私たちは、たびたび罪と不正と偽りと暴力の闇に閉ざされてしまう人間存在を照らすために主が来られるのを希望の内に待ち望んでいる義人たちの心臓の鼓動を感じ取ることができます。

2, 24 人の長老たちによって歌われた賛美歌は、2 つの詩編に語られていることに基づいて構成されています。メシアについての詩編 2(2:1-5 参照)と神の忠実さを讃えている詩編 99(99:1)です。人間の歴史全体に対して主が成し遂げられる正しく変わる事のない裁きを崇めるという目的が、このような方法で達成されています。

主の恵み深い介入には、ちょうど神のみ顔にはそれを定義付けている 2 つの容貌があるように、2 つの側面があります。神は裁き手でありながら、救い主でもあるのです。主は悪人を断罪し、忠実な人に報いをお与えになります。主は正義でありながら、何にもまして愛なのです。

今や神の御国において救われた義人という身分は意味深いものです。彼らは 3 種類の主の「しもべ」に分けられます。預言者、聖なる民、主の名をおそれるすべての人(黙示録 11:18 参照)です。これは、洗礼の時に受け、信仰と愛の生活において花咲いた賜物に基づく、神の民の霊的な肖像画の一種です。小さな者の中にも大きな者の中にもこの「スケッチ」が描かれているのです(黙示録 19:5 参照)。

3, この賛美歌は、すでに申し上げましたとおり、壮大で栄光に満ちた黙示の場面に言及している 12 章からの数節を用いることによって、構成されています。そこには、メシアを産んだ婦人とよこしまで凶暴な竜との間の戦いがあります。この善と悪、教会とサタンとの対決の最中に、突然、「訴えていた者」(黙示録 12:10 参照)が投げ落とされたこと知らせる天の音が響き渡ります。この「訴えていた者」とは、ヨブ記の中で語るひとりの登場人物に対して用いられているヘブライ語の「サタン」という名前の翻訳で、天における神の宮廷のメンバーの一人で、公の家臣の務めを果たしています(ヨブ 1:9-11; 2:4-5; ゼカリヤ 3:1 参照)。

彼は「私たちの兄弟」を「神の前に、日夜訴えて」いました。つまり、彼は義人の信仰に対する忠実さに疑いを投げかけていたのです。サタンである竜は口を閉ざされますが、その敗北の原因は、「小羊の血」(黙示録 12:11)、贖い主キリストの御受難と死です。

キリスト者の教殉による証しは、主の勝利に伴われています。そこには、二心なしに「死に至るまでのちを惜しまなかった」(同上)信者たちによる、小羊の贖いのみ業へ



の親密な参与があります。この考えはキリストの言葉に由来しています。「自分のいのちを愛するものはそれを失い、自分のいのちを憎む者はそれを保つ」(ヨハネ 12:25)。

4, この歌を歌っていた天の独唱者は、いただいた救いのために喜びに満ちて一緒に歌うようにと天使たちの聖歌隊全体を招くことによって、歌を終わりへと運んでいきます(黙示録 12:12 参照)。私たち自身も、感謝、賛美、希望をもって、この声に従いましょう。たとえ試練の最中であっても。試練は、栄光へと向かう私たちの道の目印です。

すでに捕えられ、火刑台の上で火炙りになるのをまっていた時、殉教者聖ポリカルポが「全能の神なる主」に向かって語りかけた言葉に耳を傾けることによって、そのようにいたしましょう。「主よ、全能の神よ、あなたが愛する祝福された御子イエズス・キリストの父よ、私はあなたをたたえます。あなたは今日、この時にあたり、私を殉教者の数に加え、御子キリストの苦しみの杯にあずかれるようにとりはからってくださいましたからです。こうして私の魂も体も、聖霊がお与えになる不死のうちに永遠のいのちに復活することができるのです。きょう、み前において、私があなたに嘉納される肥えたいけにえとして、彼ら殉教者の中に受け入れられますように。あなたはこれをあらかじめ備えられ、前もって現され、成就してくださいましたのです。偽りのない真実の神よ、このゆえに、またすべてについて、私はあなたを賛美し、あなたをたたえ、あなたが愛する御子、天の永遠の大祭司、イエズス・キリストを通して、あなたに栄光を帰します。イエズス・キリストによって、栄光が今も世々に、その方と聖霊と共にあなたにありますように。アーメン。」(Atti e passioni dei martiri, Mirano, 1987, p.23 毎日の読書第2巻 p.148, Fr. 小高毅 ofm 訳)

## 第1週 金曜日 晩課 第1唱和

### 詩編 41

1, ただ今私たちが拝聴いたしました詩編 41 を理解し愛するようにと私たちに促すひとつの理由は、イエズスご自身がこの詩編を引用なさったという事実です。「あなた方皆に言うのではない。わたしはわたしが選んだものたちを知っている。聖書がこう言っている通りである。『パンを分け合った友が、わたしを裏切った(わたしにかかとを上げた)』」(ヨハネ 13:18)。

それは、イエズスにとって地上で過ごす最後の夜、あの高間においてのことでした。裏切り者ユダに対してイエズスはまさに最高の一切れを差し出そうとしておられました。彼は、友に見放された病気の人の嘆願であるこの詩編のこの箇所を思い出されたのです。この古代の祈りの中に、キリストはご自身の深い悲しみを表現するための言葉と感情を見出されたのです。

確かに病気ではありましたが、それよりも特に自分の敵からの残酷な皮肉(詩編 41:6-9 参照)とひとりの「友」による裏切り(詩編 41:10 参照)によって苦しんでいる人の口から発せられたこの詩編全体の構想をたどり、その意味を明らかにしていくことにいたしましょう。

2, 詩編 41 はひとつの幸いによって始まります。それは、「貧しい人を思いやる」ひとりの人、まことの友に向かって語られています。「病気の床」に伏している時、苦しみの日、主によって報われるというのです(詩編 41:2-4 参照)。

この嘆願の中心は、次の段落にあり、これを語っているのはこの病気の人です(詩編 41:5-10 参照)。彼は、痛みはあらゆる罪の結果であるという旧約聖書の伝統に従いながら、神に赦しを願うことによって自分の話を始めています。「神よ、私はあなたに叫ぶ『あなたに罪を犯した私をあわれみ、いやしてください』」(詩編 41:5; 詩編 38 参照)。古代のユダヤ人にとって、病気は、良心に向かって回心を始めるようにと促す呼びかけでした。

このような見方は、永遠の啓示者であるキリストによって、あたかも打ち払われたかのようなものです。病気の中にある苦しみは秘められた価値を隠しており、魂を浄め、内的に解放し、富むものとしてくれる道となり得るものなのです。それは、浅はかさ、わがまま、罪に打ち勝って、神とその救いをもたらすご意志とに熱心に信頼をおくように、という招きなのです。

3, ここで、この場面に悪人が登場してきます。彼らは病気の人を訪問しますが、慰めるためではなく攻撃するためです(詩編 41:6-9 参照)。彼らの言葉は残酷で、ここで祈っている人の心を傷つけます。この人は彼らの無慈悲な悪意を感じ取っています。同じような体験は卑しめられた貧しい人々にもあり、孤独に陥った彼らは、自分が家族にとってさえ重荷になっていると感じています。もし彼らが何か慰めになる言葉を聞く機会があっても、すぐにその人たちが語った言葉の中に偽りと偽善の響きを聞き分けてしまうのです。

ここで語られている通り、祈っている人は、今や敵となり憎しみに満ちた姿をしている自分の友人のひとりからさえも無関心と乱暴な扱いを体験しています(詩編 41:10 参照)。友人たちについて、この詩編作者は「かかとを上げた」という動作を当てはめています。これは、敗北した敵に対して踏みにじってやるぞということを強調する脅迫するしぐさ、あるいは騎手が馬を前進させるためにかかとでする合図の一撃なのです。

私たちに敵対する人が、ヘブライ語で文字通りには「平和の人」である「友」、私たちが信頼していた「友」であった場合、私たちの苦さは底知れないほど深いものとなります。ヨブの友人たちのことが思い出されます。生涯の伴侶であった人々が無関心で、敵意を抱くものとなったのです(ヨブ 19:1-6 参照)。この祈りの中には、病気や弱さの時に、自分たちの味方になってくれるはず人々からさえも忘れ去られ、卑しめられている多くの人々の声もこだましています。

4, しかし、詩編 41 の祈りは、このような暗闇の中で終わるものではありません。祈っている人は自分の地平線に神がお現れくださること、再びご自分の愛を示してくださるということを確信しています(詩編 41:11-14 参照)。神はこの病気の人に支えを与え、ご自分のみ腕の中に抱き寄せてくださるのです。こうして、再び、この人は自分の主の「み前に」(詩編 41:13)、あるいは聖書的用語を用いるなら、神殿において執り行われる典礼に預かる体験ができるでしょう。

この詩編は、痛みを刻み込まれながら、光と希望を垣間見ることによって終わっています。このような視点において、私たちは、聖アンブロジウスがこの詩編を特徴付けて

いる幸せ(詩編 41:2 参照)について解説しながら、どのようにしてこの詩編の中に復活へと導くキリストの救いをもたらす御受難を黙想するようという預言的な招きを見たのかを理解することができます。実際、この教会の教父は、この詩編を読みながら、次のように解説しているのです。「いかに幸いなことか、キリストの惨めさと貧しさを思う人は。キリストは富んでおられたのに、わたしたちのために自ら貧しい者となってくださったのです。キリストは肉においてご自分の上に貧しさを引き受けてくださったので、ご自分の御国においては豊でありながら、肉においては貧しくなられたのです。ご自分の豊かさにおいては苦しむことはありませんでしたが、私たちの貧しさにおいて苦しまれたのです。苦しまれたのは、神性の充満においてではなく肉だったのです。あなたが豊になりたいなら、キリストの貧しさの意味悟るように努めなさい。十字架を恥としたくないのなら、キリストの十字架の意味を、あなたの傷を癒していただきたいなら、キリストの傷の意味を、永遠のいのちを勝ち得たいのなら、キリストの死の意味を、復活を見出したいのなら、キリストの埋葬の意味を、悟ることを求めなさい」(Commento a dodici salmi; SAEMO, VIII, Milan-Rome, 1980, pp. 39-41)。